

山形工科短期大学校第二十六期生のみなさん、本学への入学、誠におめでとうございます。保護者の皆さまにもお祝い申し上げます。

まずは、新型コロナウイルス予防のため、通常とは多少異なる形での式典の開催となりますこと、ご理解頂きたいと思っております。

感染症の終息はまだまだ見通しが立たず、不安を抱かれている新生もいらつしやると思っております。また、校舎への山道を登ってこられて、周囲の木々が倒れていたり、道路が枝などで荒れていたりするのを見て驚かれたと思います。今年の冬は例年になく大雪で、山道の通行に様々な障害が発生する程、開校以来最も大変な状況でした。道路の様子は未だ万全ではありませんが、行政にもお願いしておりますので、少しずつ環境が整えられると思っております。このような状況ではありませんが、教職員と、皆さんの所属する派遣企業が新たな学びの場をしつかりと整え、全面的に支援致しますので、日々、勉学に励んで頂きたいと思っております。頑張ってください。

さて、感染症の問題に覆い被さるようにして年明け以降に世界を揺るがす大きな問題が起りました。ロシアによるウクライナへの侵略です。毎日の報道で胸を痛めている方も多いと思っております。私自身、辛い気持ちになりつつ、いち個人では当然、戦争を止める力はなく、一方で自分は日常生活を日々、平穏に送られていることに心が乱される思いです。大勢の一般市民に被害が及んでいること、これこそが大きな問題ですが、エネルギーや物資の面で既に我々の日常生活にも様々な影響が現れており、これは今度、更に深刻になると言われています。このような状況において、建築や木工に携わる我々として、何か出来ることはないのでしょうか。

建築家の坂茂さんという方がいます。ご存知の方もいらつしやると思います。彼は一般の建築も設計しますが、特に紙管（紙の筒）を使っ

た建築で有名です。紙管は、一定の強度がある割に、価格が安く、軽量かつ比較的組み立てが容易で、再利用が可能であるという特長を持っています。特に災害時の仮設住宅などとして使われる実績があります。坂さんは東日本大震災の際、紙管の柱と梁で骨組みを作り、これに布を吊すことで間仕切とし、体育館など避難所の中で家族単位のプライバシーが保たれる空間を提供しました。大空間に多くの家族が雑魚寝では心が休まる暇がないと考えたからです。坂さんはこの仮設間仕切を使って、今回のウクライナ侵略で避難を余儀なくされた市民に対しても活動しています。ウクライナと国境を接するポーランドの町で坂さんと繋がりのある同国の学生などが中心になって紙管の間仕切を設置し、坂さん自身も現地入りしています。この活動は住環境を創り出す立場として、骨組みの完成度はもとより、その発想、行動力が素晴らしいと思います。皆さんは今すぐに避難民に対して直接的に貢献するのは難しいかもしれませんが、こういった取り組みを支援したり、参考にすることは出来ます。また、この例からも分かる通り、建築関連のものづくりの分野は、万一の非常事態にも力を発揮出来ます。

このような状況を踏まえ、皆さんに求められるのは、日々、住環境の知識・技術・技能を身につける努力をすることと、大局的にものごとを見る目を養うことです。これからの世の中の動きに強い関心を持って、自分自身の考え方をしっかりと持てるようになって下さい。皆さんが住環境を学ぶのは、皆さん自身のためである以上に、その先にいる多くの人々の役に立つためであることを忘れずに一步一步、歩んで行って欲しいと思います。

皆さんの二年間の成長に期待しつつ、その第一歩となる今日の良き日を改めてお祝い申し上げます。

令和四年四月十五日

山形工科短期大学校 学校長 小幡知之